

城山三郎『そうか、もう君はいないのか』を再読する

表紙カバー裏から。彼女はもういないのかと、ときおり不思議な気分襲われる。気骨ある男たちを主人公に、数多くの経済小説、歴史小説を生みだしてきた作家が、最後に書き綴っていたのは、亡き妻とのふかい絆の記録だった。終戦から間もない若き日の出会い、大学講師をしながら作家を志す夫とそれを見守る妻がともに家庭を築く日々、そして病いによる別れ…。没後に発見された感動、感涙の手記。



父が遺してくれたもの—最後の「黄金の日日」と題した、次女の井上紀子さんの手記も心に迫る。手記によると、本書は城山さんが亡くなったあと発見された原稿を、新潮社編集者が一編にまとめたものという。俳優で 2011 年に亡くなった児玉清さんは、心にひびく「解説」の中で、本書『そうか、もう君はいないのか』というタイトルを目にしたときは、胸に鋭い一撃をくらったような衝撃であった。最愛の伴侶を亡くした寂寥感、喪失感、孤独感とともに、亡き妻への万感の想いがこの一言に凝縮されていると書いている。

本書を久しぶりに再読したのは、「そうか、もう君はいないのか」という言葉を思い起こしたからだ。最近も何人かの友人、知人が亡くなった。いつか会えると気楽に考えていた友人と、もう二度と会えないと思うだけで悲しくなる。そんな二人の友人について、すこし記しておきたい。

一人は数ヶ月前に知人から訃報の知らせをもらった山崎丈夫さん。1979 年に名古屋市立女子短大(市短)に就職して、すぐ山崎さんが事務局長を務めていた東海自治体問題研究所(東海研)で活動するようになった。東海研は私の研究・交流の大切な場であり、いくつかの地域・自治体調査に参加した。とくに印象に残るのが、岐阜県「中津川市政調査」であり、岐阜大の山本堯先生を代表に、山崎さんと私が調査報告書をまとめた。山崎さんのきめ細かな地域調査から多くのことを学んだ。この調査で忘れられないのが、3人で美味しい酒を酌み交わしたことだ。その後、山崎さんは大学で教え、地域社会やコミュニティなど数多くの本を出版された。

山崎さんは私にとって貴重な研究仲間であり、「兄貴」のような存在だった。3年半ほど前に大阪に転居したこともあり、しばらく音信が途絶えていた。また美味しい酒を飲み、語り合いたいと思っていたのに、まさか訃報が届くとは残念でならない。

もう一人は、数年前にご家族から訃報の知らせが届いた市短時代の同僚だ。いつもの年賀状が届かないので気になっていたが、突然亡くなったことを1年後に知った。大阪に転居したので、すぐにでも会いに行くべきだったと後悔している。市短時代に、学生さんの「こころのケア」など多くのことを教えてもらった。よく飲み議論したものだ。久しぶりに語りたいことも多かったが、「そうか、もう君はいないのか」。悲しい…。

(2021年8月19日)